

# 王滝川締切の記

—7月23日—

## □川は生きている

一体、ダム建設のための河川の締切工事は、ダム工事の全体からみれば、局所的な準備作業の一つに過ぎないといえる。しかし、川はまさに生きているのだ。したがって、いつでも自由勝手に締切られるというものではない。特に日本の河川は、流れが急で雨量の変化に敏感だから、締切時期の決定はむずかしくなる。「いつ締切るか？」——まずこれを決定するために、技術の最高責任者は深刻に頭を悩ませる。

## □いつ締切るか？

「熟慮断行」という言葉は、まこと河川締切のためにあるといい。締切の時期は、河川の流量と締切前後の気象状況を慎重に考慮洞察した上で決定される。王滝川の場合は、過去の統計から推して、濁水期である10月半ばから翌春融雪前までを最安全時期とする。次は梅雨明けから8月の半ば頃まで。第1の時期に決行できれば問題はない。しかし牧尾ダムの場合は、前述したような理由からバイパス完成が遅れたため、残念ながら間に合わなかった。もし技術的安全だけを第一義に考えるのなら、10月まで締切は延ばすべきであるのかも知れない。だがダム工事のスケジュールは、いまや1日を争う段階にきている。それに7月20日前後の王滝川の流量は30トン、「やるなら今だ」技術者なら誰しもこう考えるに違いない。しかし——おそれていた不可測・不可抗の自然の脅威がすでに迫りつつあったのである。

## □接近する台風11号

私たち日本人にとって、台風は全く歓迎されざる“季節の

訪問客”だ。初期段階のダム工事にとっても、もちろんこれほど苦手の敵はない。このころ、太平洋上を気まぐれに散歩しながら、本土に近づきつつあったのが11号台風である。相次いで発せられる台風警報。公団本部の桜井理事以下技術首脳は、台風接近の緊急情報を前にして苦慮を続けた。しかし、22日夜ついに東海地方は台風圏内に入った。23日の締切は一応見送ろう——ようやくこの決定がなされたのは22日も深夜であった。

## □台風回避——締切決行

22日夜まではこのように緊迫した気象状況であったが、23日が明けると事態はガラリと急変した。午前9時発表の気象特報は、“御前崎に上陸した台風は東京北方にあり、その余波も完全に回避された”というのである。そして週間予報も「当分の間グズついた天候だが大雨はない模様」という。これによって即座に決行の断が下された。にわかには活気づく現場、しかも木曾谷の上空はその頃から暗雲を吹き払って、奇蹟のような快晴に変わりつつあった。

午前11時5分、瀬戸所長の右手が高く上る、と同時に満を持していた33台の重機械群が一せいに活動を開始、戦場のようなすさまじい轟音が木曾谷を埋め、対岸に並んだ黒山の人垣がカタズをのむ。“王滝川の歴史がいま変わりつつある。——力強い重機械群の活動をみていると、この感じがいかにもビタリとくる。11時35分、意外に早く荒締切完了、続いて本締切に移る。

そして再び昼夜兼行でコッファ・ダム(締切堤)の築堤が、その態勢のまままで力強く押し進められてゆくはずであった…。



準備全く完了、いよいよ締切開始。待機していた重機械群が一せいに活動



30分後、荒締切は無事完了



重機械の轟音が木曾谷の天地をゆるがすうちに王滝川は締切られてゆく



すっかり閉塞された王滝の流れ  
手前はアリス・チャーファの22トンプラ

連日の突貫作業でオペレーターも疲れ切っている。締切開始までのしばしの時間をまどろむ(注:非演出)

